
会えて良かった

星野 雫(Elwing)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

会えて良かった

【Nコード】

N0286M

【作者名】

星野 雫 (E l w i n g)

【あらすじ】

通勤で見かける人、何故か目に留まってしまった。一度そうになると、気になる。どこかで見た様な気がする…。それは、中学の頃の同級生だった。その当時は、お互いにそんなに特別な相手じゃなかった。けど、改めて出会ってみると…。動き出した気持ちは止まらない。

一話ごとに視点が入れ替わる形にしてみました。時系列は時として乱れてるかも…？

そして、もう一つのお題は、マスクメロンさんが出していたお題です。それぞれに、お題三題を絡ませました。かなり強引になってしまった部分もあるかも知れませんが。

よろしければ、感想、指摘などよろしく願っています。

また、申し訳ありませんが、以前、ここに掲載したお話は、いずれ、もっと練り直して、別の形で発表したいと思っています。

失礼いたしました。

出会い（イヤホン、つめきり、ボールペン）

最近、僕にはとても気になる女性がいた。

それは、通勤途中、特に朝の出勤時によく見かける女性だった。

最初は、彼女がどんな人なのか、どの誰なのか、何も分からなかったけど、何か、どこかで見た事がある様な、でもそれが何なのか判らず、でもとにかく気になっていた。そして、彼女を毎日見かけるのが楽しみになっていた。

その当時、彼女に関して分かっていた事は、僕の会社時間と重なるような時間に、僕と同じ駅から電車に乗る事。そして、途中までは同じ電車に乗るけど、彼女の方が僕より先に電車を降りる事。そして、駅まではバスで来ているらしい事。

他には、彼女はいつも、ちょっと凝った形のイヤホンを付けていて、アイボッドが何かで音楽を聴いている様だった事だった。そして何故か、よく周囲を見回していた。なので、すっかり彼女を見つめていると、目が合ってしまったって照れてしまう事があった。

もっとも、照れるのは僕だけで、彼女のほうは僕と目が合った事には気が付きもしないのか、視線はいつも僕を素通りしていったけど…。

あんまりに平然と僕の上を視線が横切っていくので、本当に見えてるのか？なんて思ったりもしたけれど、見えているのは確かのようにだった。

朝、そんな彼女と会いたくて、仕事は辛いけど、僕は決して遅刻はしなかった。

けど、休日はつまらなかった。

ごろごろと部屋でテレビを見たり、本を読んだり、そしてつめを

切ったり…。最高につまらなかった。

そんな休日のある日、ふと、何の気なしに、中学の卒業アルバムを手に取った。

そして、何とそのアルバムの中に彼女を発見した。どこかで見た事がある…。その感覚がぴたり、とはまった様に感じた。間違いない、彼女だ。そう感じた。どうして、気が付かなかったのか、と言えば。単純だけど、中学当時と髪型が変わっていたからだった。けど、そう。この子だったら僕には僅かだけど記憶があった。

たった一回だったけど、会話を交わした覚えがあった。話題は『つめきり』だった。

確か、脇にカバーが付いたタイプならば、切ったつめが飛んでいないから、散らからなくて便利。そんなどうでもいい様な事だった。

「そうかあ、この子だ…。だとすると同い年だったのか…」

だとしたら、ちょっと変わった子かも知れないな。などと、ほとんど話したこともない彼女の事を勝手に想像しはじめた。

アルバムだったので、彼女の名前も分かった。『島崎 加奈子』

それまで名前も知らなかったけど、名前が分かった事で、彼女の事を、より身近に感じたのは確かだった。

そのせいなのか、その翌週、久しぶりに帰ってきた日、改札口の手前で、あの、トレードマークとも言えるイヤホンを付けた彼女を発見した僕は、大胆にも彼女を呼びとめた。

「ねえ、島崎さん」

声をかけた僕自身もびっくりしていたけど、僕の呼びかけに振り返った彼女は、もつとびっくりした様な表情を浮かべていた。

「だよね？」

僕はそんな彼女にかまわず、確認しながら近付いていった。

近付いて、よく見てみると、彼女はちよつとだけ赤くなっている。「えと、えと…」などともつていた。どもりまくる彼女を見て、落ち着きを取り戻した僕は、一旦、咳払いをすると「ちよつと時間いいかな？」などと、言つてのける程の大胆さだった。

そして、積もる話も色々あつたけど、僕たちは、その日のうちにお互いのメールアドレスを交換した。最初、携帯の番号を訊いたのだけど、それはやんわりと断られた。それにはちよつと落ち込んだけど、彼女はすぐにメモ用紙とボールペンを取り出すと、自分のメールアドレスを教えてくれた。

僕はそれでも十分だったけど、それ以上に嬉しかったのは、何と彼女の方も、僕の事に気が付いていて、しかも中学校の同級生って事も知っていて、僕の名前も覚えていた。

そして、ずっと気になつていた。そう言つてくれた事だった。だから、あの後、二人がお互いを指差しながら言つた言葉は「つめきり！」だった。

とにかく、その日を境に、僕の日常は一転した。人生バラ色とはこの事だ。つて感じで、我ながら現金なものだな、とも思つたけど、でも、嬉しいことは仕方が無かつた。そして、彼女も喜んでくれている様だったので、それも嬉しかった。

僕と話す時、彼女はいつも僕をまっすぐに見詰めてくれた。僕が少しくらい小さな声で話しても、彼女に隠すことなんて出来なかつた。「耳がいいんだね」そう誤魔化すと、ちよつと俯いて「そんな事、ないわ…」そう言つたけど、僕をまっすぐにみつめて、僕の言う事を一言だつて聞き漏らさないんだから、相当に耳がいいのは確かだった。

いつも、お互いをまっすぐに見つめ合つて話し、笑う。僕たちは春真つ盛りだった。

まあ、生まれたてのカップルなんだから、どうしようもない、っ

て事だった。

私はだれ？（影、月、海）

どこか遠いところで音がする。 誰かが私を呼んでいるのだろうか？

別に聞こえなくなたって構わない。 どうせろくな事じゃない。 だから、何も聞こえなくても、何も困りはしない。 そう考えてしまったせいだろうか？ 私の耳は、あまり役に立たない。

ところで、私、誰だっけ？

鏡の中の自分に問いかける。

「あなた、どうしてここにいるの？ どうしてまだ生きてるの？」
別に生きる目的なんかない。 生きていく必要なんてない。 けど、死のうとするのも面倒くさい。 だから、とりあえず、積極的には死のうとはしない。 それだけだった。

けど、月夜の晩など、自分の影にさえ怯えてしまう。

死ぬのは怖くない、そう言いながら何を怯えているのだろうか？

けど、その事を考えると、考えようとすると、激しい頭痛がする。

どこかの海、岩場と思われる光景が頭の中でフラッシュして、ただ頭が痛くなり、記憶が跳んでしまう。

なので、それ以上は考えられない。 海で何かあったのだろうか？

けど、それが何か思い出せない、どうすればいいのかも判らない。 まあ別に、それもどうでもいいけど…。

そんな私でも、ただ生きていく為に、働く必要があった。 そして、働く、という事は私にとっても好都合な面はあった。

つまり、一日の時間をやり過ごすための暇つぶしだった。 何の希望も持たない私にとって、つらい、という感覚はなかった。 何でも言われた通りにこなした。 その為か仕事ぶりの評判はよかった。 そして、褒められた時には笑顔で「ありがとうございます」そう

返すくらいの事はしていた。心の無い笑顔なら、笑顔に見える表情なら作ることが出来た。

人間関係を一定の状態に保つ事は、面倒ごとを遠ざける為に必要な事だったから。

ただ、その人間関係をその一定以上に踏み込む事はしなかった。

特に男性とは…。あの時、感じていた幸福の頂点から一気に突き落とされる様な、突き落とされただけではなく、踏みにじられ、徹底的に打ちのめされた。

何があつたのか、それは忘れた。いえ、忘れない。二度と思い出したくない。

幸せさえ求めなければ、希望さえなければ絶望もないのだから…。

少なくとも、この間まではそう考えていた。

けど、その考えに変化が生じ始めた。

たまたま一本早い電車に乗った時だった。見たことのある男性がいると気が付いた。それは、確か中学校の時にちよつと気になっていて、一度だけ話したことがあつたけど、卒業と同時に離れ離れになつてしまい、なんとなく忘れていた人だった。

彼は周囲の事なんかまるつきり気にしてないみたいで、電車の隅で、壁にもたれてうつらうつらとしていた。目を閉じるとあつと言つ間に寝こけて、口からよだれが垂れてるのを見たとき、私は思わず笑ってしまった。もちろん、声を出したりなんかしないけど、自分でも気が付かない内に、あまりに自然に笑っていた。それは作られた笑顔ではなかった。心の底から湧き上がった微笑だった。そう。そして何となく、その彼が気になった。

だから、私は朝の電車を一本早くした。

毎朝、彼の行動を見るのは楽しかった。どうやら、彼は駅までは自転車のようだった。自転車置き場の方から時間ギリギリに走りこんでくる姿を見つける度に微笑んでしまった。

そうして、しばらく時間が過ぎ、私が彼を見ていることに気が付いたのか、それとも全く別のきっかけなのか、いつしか彼から見られていたように感じた。

そうになると、私としては逆に気恥ずかしくなった。けど、私はそんな状況を受け流す技術にかけては一日の長があった。自分の気持ちを抑え、表情を一定に保ったまま、平然と彼の目を見て、顔を見、そのまま一定の速度で視線を移動させていく。そうやって、彼と目が合ってしまった時も平然とやり過ごしていた。

そう。その時すでに気が付いても良かったはずだった。長い間眠っていた。止まっていた私の時間が再び動き出している、という事に。

気持ちなんてなかったはずの私なのに、いつの間にか『抑えなければいけない気持ち』が生まれていた。それが何時からなのか？はつきりと意識したのは、つい最近だった。

そして、私が自分のそんな心の変化を意識したのと前後するかの様に、彼が私に声をかけてきた。その瞬間、何よりも驚いたのは、私がそれを待ち望んでいた事だった。

彼なら私を救ってくれるんじゃないか？ 私に、希望を持つ心を取り戻させてくれるんじゃないか？そう考えた。つまり、私は彼を好きになり始めていた。

今、月夜の晩に歩く時、私の影に寄り添う様に歩く影がある。時々影が重なるのを見ながら、私は穏やかな気持ちになれる。

これが、人を好きになるって事だろうか？
久しぶりに取り戻したその感覚に、人生を取り戻せる、そう感じ
始めていた。

嬉しい時間（ネコ、すべり台、自動販売機）

今、僕は、神様でも仏様でも、となりのおじさんにだってさえ、とにかく感謝の気持ちでいっぱいだった。

どうして？ それは、すごく単純だったけど、彼女が出来たからだった。

僕の彼女居ない暦二十五年にとうとう終止符が打たれた。 やつてる事自体はこれまでと大して変わりはないけれど、朝、駅前で待ち合わせる様になったのは、気持ちの上ではとても大きな変化だった。

遠くから見ていると、彼女は、時としてまるで魂が抜けてしまっただかの様な無表情で佇んでいる事があった。 けど、僕が手を振り、彼女が僕の存在に気が付くと、花が咲くような笑顔を浮かべて、手を振り返してくれた。

なので、僕は何の疑問も感じなかった。 彼女が障害を負っている事も、まして、心に深い傷を負っている事も感じる事が出来ずにいた。

そうして、朝は毎日の様に待ち合わせて同じ電車に乗り、会社帰りも、お互いの都合がつかなら、時間を合わせて駅前の喫茶店に寄り、そして時には、駅から彼女の家までを、少し時間をかけて歩いて行ったりした。

月夜の晩など、二人の影が並んで伸びるのを見るのはくすぐったい感覚があった。

そして、何より変わったのは、休日の過ごし方だった。

これまで、部屋でごろごろするしか能がなかった僕だったけど、彼女とデートする様になったのだから、それこそ最高の休日って感

じだった。

同じ中学出身なのだから、当たり前のようにお互いの自宅はせいぜい自転車で行き来できる距離で、思いついた時に電話して、近くの公園を一緒に歩く、なんて事をした。

ある日、公園を歩いていると、一匹のネコが昼寝をしていた。

ネコってというのは、大抵は人見知りが激しくて、近付いていくと、ある程度の距離で警戒し始めて、さらに近付いていくと、身を翻して走り去ってしまう。

普通はそうだった。

けど、何故かそのネコは違った。

近付いても逃げないばかりか、僕たちが撫でると、のどを鳴らし、嬉しそうに目を閉じたりした。それどころか、抱き上げても抵抗せず、思わず「おまえ、本当にネコか？」と疑問をぶつけてしまった。

それでも、そのネコが愛嬌たつぷりにしていたのは確かだった。

「この子、お腹すいてるんじゃない？」

彼女のそんな言葉に、近くの自動販売機でパック牛乳を買ってきて、僕の手から飲ませてみると、ぺろぺろと、一心不乱に飲んでしまった。

「あわてるなよ、まだあるから…」

必死になって僕の手をなめるネコが可愛くて、つい表情がゆるんだ。

「ほらあ、やっぱりお腹がすいてたのね。この子、野良ネコなのかなあ」

「そうかもね…。うちで飼おうかな…」

それは何気なく言った事だった。僕の母親が割とネコは好きはずだし、そんなに反対はされないだろう。って思いもあったし…。

「優しいのね…」

「え？」

突然のそんな言葉に、彼女に視線を向けると、何故か頬を染め、瞳に涙を浮かべた彼女が僕を見つめていた。

「ど、どうしたの…？」

突然の彼女の涙は、訳がわからなかった。

「な…、何でもないわ！」

彼女は突然そう言うと、急に走り出し、すべり台の上に駆け上がってしまった。

訳が判らなかったけど、でも、とにかく彼女を追った。すべり台の上で僕に背中を向けてしまった彼女に向かって、僕は必死に話しかけた。

「ホントにどうしたの？ 何か変なこと言った？」

けど彼女は、そんな僕の言葉などにはまるで構わず、突然振り向くと話し出した。

「ううん。でも、怖いの」

「自分の気持ちが怖い…、この気持ちが大きくなると、大きくなればなるほど、なくした時が怖い…。あなたを信じたい、けど私は……。なのに、気持ちが止まらない…」

その不思議な告白に僕は戸惑った。そして、その時初めて、彼女には何か事情がある事を感じた。だとしたら、僕は彼女を支えたかった。好きだったから。

「僕も怖い…。でも…。でも、君を好きな気持ちは止めたくない…」

そう言いながら、彼女のとなりまで登り、随分と迷ったけど、ずっと彼女を抱き寄せた。実のところ、これまでも二人の気持ちは同じはず、そう感じながらも勇気が出せず、もう一步を踏み出せずいた。

それを彼女がもどかしく感じてるだろうか？ などと、色々考えたりしたけれど、考えれば考えるほど、どうすべきかなんて判らなくなつて、結局どうする事も出来ずにいた…。

けどその時、やっと踏み出したのだった。

そうして、超オクテの僕は、やっと想いを告白し、その日は、記念すべき、僕たちが初めてキスを交わした日になった。

結局、ネコは彼女の方が飼う事になり、彼女に言う処によると。

「あのネコには、あなたと同じ名前を付けたから、あなたが私を怒らせると、私はあのネコにやつあたりするからね？ だから、あのネコを大事に思うなら、私を大事にしてね？」

という事だった。

理屈はさっぱり判らなかつたけど、僕も、彼女も、笑顔で一杯だった。

ずっと一緒に(メロン、くつべら、海ぶどう)

彼の最初の言葉は「良かった」だった。

彼がネコに優しくする処を見ているうちに、彼への想いがどうしようもなく膨れ上がっていくのが分かった。そして、私が抱え込んでいる事に関して、これ以上、彼に隠しておく事が出来ない事を意識した。

そして今日、彼に全てを話した。もちろん、思い出したくも無い、忘れていた事なのだけど、でも、忘れたふりをしただけでは解決できない事なのも確かだったから。

これまでは、自分の気持ちすら殺して、ただ死んでいない、そんな人生を過ごそうとしていた。けど、彼と出会い、それだけでは済まない。もっと多くを望みたくなってしまった。

そして、その場合は、この慟哭を避ける事は不可能だった。克服し、乗り越えないと、彼の気持ちを正面から受け止めることができないから…。

だから、全てを話した。

短大生の頃に恋をした事を、けど、相手にとっては恋などではなかった事。そして、誘われるがままに海に行き、集団で暴行された事。そして、誰の子か分からない子供を身籠り、墮胎した事。そして、その時に受けた傷やショックで、今も耳がほとんど聞こえない事。

「これ、アイポッドじゃないのよ？」

自嘲気味の笑みで、補聴器を彼に指し示した。

そして、彼の瞳を真っ直ぐに見つめた。どうか、私を哀れまないで…。

そう思いながら、真っ直ぐに、祈るように彼を見つめた。

彼は最初は戸惑っていた様だった。けど、話が進むうちに、真剣な表情になり、真っ直ぐに私を見つめた。一言も聞き漏らすまい、そう考えている様だった。私は、私の全てを受け止めて欲しくて、何一つ隠さず、全てを告白した。

そうする事で、これまでより、少し心が軽くなった様な気がした。

その時の彼の答が

「良かった」

だった。一瞬、意味が判らなかった。良い事なんか何もなかったのに…。

でも、彼の言葉は私の想いを遥かに超えていた。

「生きててくれて良かった。心を取り戻してくれて良かった。そして…」

「きみを好きになって良かった」

そう言っ、私を抱きしめてくれた。

季節が巡り、彼に初めて声をかけられた日から約半年、彼の予約してくれた小料理屋で一緒に食事をした。普段はその辺の居酒屋なのに、珍しくちょっと洒落たお店だった。

「高くないの？」

そんな心配もしたけれど、その辺は一応計算してある様だった。どうしてわざわざ？とも思った、一つは分かりやすかった。今日は私の誕生日だった。そしてもう一つは、料理が出てきて分かった。

「海ぶどうでございます」

「え？」

「覚えててくれたんだ？」

そう、もう私自身が忘れていたけれど、以前「海ぶどうって食べてみたいな」そんな事を言った記憶があった。彼は「そうだった」なんてとぼけてたけど、照れまくってる表情からはバレバレだった。けれど、それだけじゃ無い様だった。

出される料理はどれも美味しかったけれど、いつもの様には会話が進まなかった。

彼は、何かを言おうと話し始めるんだけど、すぐにどもって、口ごもってしまい、毎回「あの…」とか「あー…」とか、まるで会話にならなかった。

けど、それはすぐに私にも伝染してしまった。

彼の考えている事が分かったから…。いつもと違う洒落た店、何故かビシッと正装している彼。ネクタイも普段と違うものだった。もしかすると、そのネクタイが彼の勝負ネクタイなんだろうか？

そして、真っ赤になってしどろもどろの台詞。

もう、考えつくのは一つだけだったから…。

そうになると、二人で赤くなって俯いてしまい、ほとんど会話も出ないうちに、気が付いたらデザートのメロンが運ばれてきてしまった。それを見て、とうとう我慢しきれなくなった私は言ってしまった。

「お嫁さんになってあげる」

いきなり「なってあげる」という発言は如何なものか？とも思っただけど、もう細かい事はどうでもいい、そう思った。

一瞬、虚を突かれた感じだった彼も、私の言葉に後押しされる様に「結婚してください」とやっと言ってくれた。「遅い！」そう答える私は満面の笑みだった。

その後はやっといつもの私たちに戻った。

帰りがけに、靴を履こうとする彼に「はい、ご主人様？」など言
いながらくつべらを渡してあげたら、真っ赤になってドギマギする
もんだから、私まで真っ赤になってしまった。

それでも、二人とも満面の笑みだった。

店を出て、彼の目を見て、改めて気持ちを伝えた。

「あなたに出会えて良かった。私、本当に、本当に幸せだよ」

一度はもう要らないと思っていた人生だったけど、今は何よりも
失いたくなかった。

幸せだったから。きつと、彼の想いも一緒だと思った。

だって、彼も笑顔だったから。

ずっと一緒に（メロン、くつべら、海ぶどう）（後書き）

んー。三題噺で一つのお話を、というのはいっぱい難しいですね。一応の形にはしたつもりですが、やはり強引さは否めないかな…。以前のお話は、我ながら、ちょっと出来が良くなかったかな、と思ってます。一度掲載したものを完全に削除する、というのもイケナイか、と考え、おまけとして、つけておきます。なので、おまけは、本編とは関係ない、別のお話です。（骨格が同じなのは、元になったお話だから、ですが…）

おまけ（旧、『それでも、僕は…』）（前書き）

それでも、僕は…

通勤の途中で見かける、何故かとても気になる人、実は自分の知っている人。久しぶりの再会で、お互いの気持ちが一気に加速する。そして、二人は付き合う事に。そして…。

お題としてもう一つは、マスクメロンさんがホームページで出していたお題、『イアホン、つめきり、ボールペン』、『メロン、くつべら、海ぶどう』、そして『ネコ、すべり台、自動販売機』を使った短編を並べたもの、という事です。最初は別々のお話を、思ったのですが、ふと、これはつながる、いえ、強引だけどつなが事が出来る、そう考えて、短編三話での、一つのお話として作ってたものです。

ちょっとなあ、と思って、おまけに格下げしました。一応、一度掲載したもので、消してしまうのもどうか、とも考えましたので。

その時に頂いた感想と、そのコメントを後書きにつけました。

おまけ（旧、『それでも、僕は…』）

出会い（イヤホン、つめきり、ボールペン）

もう最近、僕は色々な事が嫌になっていた。ほとんどは仕事の事だけど、なんでこうなってしまうのか？どうして僕ばかりこんな目に…。そう言いたくて仕方がなかった。

けど、それでも、会社に行く事を止める事はなかった。

どうしてか、と言えば、会社とは全く関係ないけど、僕には気になる女性がいた。

最初は、彼女がどんな人なのか、どこの誰なのか、何も分からなかったけど、とにかく気になっていた。そして、彼女を毎日見かけるのが楽しみになっていた。

その当時、彼女に関して分かっていた事は、僕の出社時間と重なるような時間に、僕と同じ駅から電車に乗る事。そして、途中までは同じ電車に乗るけど、彼女の方が僕より先に電車を降りる事。そして、駅まではバスで来ているらしい事。

他には、彼女はいつも、ちょっと凝った形のイヤホンを付けていて、アイボッドか何かで音楽を聴いている様だった。そして何故かよく周囲を見回していた。なので、うっかり彼女を見つめていると、目が合ってしまったって照れてしまう事があった。

もっとも、照れるのは僕だけで、彼女のほうは僕と目が合った事には気が付きもしないのか、視線はいつも僕を素通りしていったけど…。

あんまりに平然と僕の上を視線が横切っていくので、本当に見えてるのか？なんて思ったりもしたけれど、見えているのは確かのようにうだった。

朝、そんな彼女と会う為に、一日の仕事は辛いけど、僕は決して

遅刻はしなかった。

けど、休日はつまらなかった。

ごろごろと部屋でテレビを見たり、本を読んだり、そしてつめを切ったり……。最高につまらなかった。

そんな休日のある日、ふと、何の気なしに、中学の卒業アルバムを手を取った。

そして、何とそのアルバムの中に彼女を発見した。確信はなかったけど、おそらくは彼女だろう、そう感じた。それに、その子だったら、僕には僅かだけど記憶があった。

たった一回だったけど、会話を交わした覚えがあった。

話題は『つめきり』だった。

確か、脇にカバーが付いたタイプならば、切ったつめが飛んでいないから、散らからなくて便利。そんなどうでもいい様な事だった。

「そうかあ、この子なのかな……。だとすると同年だったのか……。だとしたら、ちょっと変わった子かも知れないな。などと、ほとんど話したこともない彼女の事を勝手に想像しはじめた。

アルバムだったので、彼女の名前も分かった。『月嶋 遥』それまで名前も知らなかったけど、名前が分かった事で、彼女の事を、より身近に感じたのは確かだった。

そのせいなのか、その翌週、久しぶりに早めに帰ってきた時、改札口の手前で、あの、トレードマークとも言えるイヤホンを付けた彼女を発見した僕は、大胆にも声を掛けてしまった。

「ねえ、月嶋さん」

声をかけた僕自身もびっくりしていたけど、僕の呼びかけに振り返った彼女は、もっとびっくりした様な表情を浮かべていた。

「だよね？」

僕はそんな彼女にかまわず、確認しながら近付いていった。

近付いて、よく見てみると、彼女はちよつとだけ赤くなっていて「えと、えと…」などとももっていた。どもりまくる彼女を見て、多少は落ち着きを取り戻した僕は、一旦、咳払いをすると「ちよつと時間いいかな？」などと、言つてのけた。

そして、積もる話も色々あつたけど、僕たちは、その日のうちに、お互いのメールアドレスを交換した。最初、携帯の番号を訊いたのだけど、それはやんわりと断られた。それにはちよつと落ち込んだけど、彼女はすぐにメモ用紙とボールペンを取り出すと、自分のメールアドレスを教えてくれた。

僕はそれでも十分だつたけど、それ以上に嬉しかったのは、何と、彼女の方も、僕の事に気が付いていて、しかも中学校の同級生って事も知っていて、僕の名前も覚えていた。

そして、ずっと気になっていた。そう言ってくれた事だつた。だから、あの後、二人がお互いを指差しながら言つた言葉は「つめきり！」だつた。

とにかく、その日を境に、僕の日常は一転した。文句なんか言う事はなくなつた。人生バラ色とはこの事だ。つて感じで、我ながら現金なものだな、とも思つたけど、でも、嬉しいことは仕方が無かつた。そして、彼女も喜んでくれている様だつたので、それも嬉しかった。

僕と話す時、彼女はいつも僕をまっすぐに見詰めてくれた。僕が少しくらい小さな声で話しても、彼女に隠すことなんて出来なかつた。「耳がいいんだね」そう誤魔化すと、ちよつと俯いて「そんな事、ないわ…」そう言つたけど、僕をまっすぐにみつめて、僕の言う事を一言だつて聞き漏らさないんだから、相当に耳がいいのは確

かだった。

いつも、お互いをまっすぐに見つめ合って話し、笑う。僕たちは春真っ盛りだった。

まあ、生まれたてのカップルなんだから、どうしようもない、って事だった。

携帯メールで連絡を取り合い、会社帰りに待ち合わせて駅前の喫茶店に寄ったり、時には休日待ち合わせて近くの公園でデートしたりした。

出会ってから一ヶ月も経つ頃には、僕の部屋にも何度か来てくれた。まあ、お互いに自宅だったので、そのまま泊り、なんて事はしなかったけど、でも僕たちは十分に満たされていた。

お互い、いわゆる結婚適齢期、って年頃で、まだ、約束はしてなかったけど、既に僕たちの気持ちは一つだと感じていた。後は僕が、何時勇気を出すのか、の問題だった。

- - - - -
急展開（メロン、くつべら、海ぶどう）

季節が変わり、彼女に初めて声をかけた日から約三ヶ月、事前に聞きだしていた彼女の誕生日に合わせて、僕は小料理屋を予約した。

まあ、僕の懐具合もあるし、そんなに有名なお店じゃなくて、ごく普通のサラリーマンの僕でも彼女と二人分の料金をなんとか負担できる範囲のお店ではあったけど。

何故か、と言えば、彼女が「海ぶどうって食べてみたいなあ」そう言っていたからだった。

当然、僕としてはちよつと奮発している訳で、それ相応の見返り

を彼女には期待していた。魚心あれば水心、じゃないけど、僕の隠した下心（それがどこまで隠せていたか、は疑問だけど）は、今日こそはプロポーズしようって事だった。

そして、僕は彼女のOKの返事を期待しているって訳だった。

結果から言えば、緊張しまくりの僕が、どもりまくっている内に、彼女に

「お嫁さんになってあげる」

などと言わせてしまい、僕の思いとしては情けないものもあったけど、結果オーライともいえる事になった。

とにかく、二人の想いを、約束を言葉に出来た僕たちは、いつにも増して上機嫌で、座敷から出る時など、ほほを染めた彼女が「はい、ご主人様」などと僕にくつべらを渡してくれて、喜んでいいやら、照れていいやら…… いや、もちろん喜んだけど。

そうになると、僕の日常はバラ色を通り越してピンク一色って感じで、何を言われてもへらへらして、ちょっと前から周囲からどうしようもない、と言われていたけれど、「とうとう壊れたか」と評判になってしまった。

そんな中、僕たちはお互いの親に正式に挨拶したり、結婚式場を予約して、衣装や、披露宴の料理を見に行ったり、と結婚と言う儀式のための手続きに奔走する事になった。

披露宴の料理では、なぜか、二人ともデザートにこだわりのあり、ホテルの人の前で「いちごがいいわ?」「え? 僕はりんごが好きだな」で言い合いになり、結局、ホテルの人の「この季節のお勧めはメロンですけど」が決め手で、デザートはメロンとなった。

もっとも、そのメロンに関して「それは中がオレンジ色のメロンですよ?」などという僕の確認を彼女に思いつ切り笑われて、一瞬「むっ」としたけど、続けて彼女が「どうして私と同じ事になるのかなあ」なんて言うもんだから、結局、僕たちは二人で真

っ赤になっちゃった。

とにかく、僕たちは結婚に向けて走り出し、それ以外は見えなかった。

けど、落とし穴は意外な所に開いていた。

その日、僕たちは横断歩道を一緒に歩いていた。けど、僕が気が付かない内に、いつの間にか彼女は僕から離れていた。

横断歩道を渡りきって、となりに彼女が居ない事に気が付いて振り向くと、彼女は道の真ん中でしゃがんでいた。

その時、回り中の誰もが注目する様な騒音を撒き散らしながら、一台の車が横断歩道に突っ込んできた。

騒音を撒き散らしながら突進する車に対して、遥は、それがまるで聞こえていないかの様にゆっくりと何かを拾って立ち上がり……そのまま撥ね飛ばされた。

何がどうして……。訳が分からなかったけど、とにかく、倒れている彼女を抱き起こした。

僕の腕の中で、必死に痛みを堪えながら、彼女は僕に向かって話しかけてきた。

「ばか！ 話すな！ 今救急車が来るから！」

彼女が何を言っているのか分からなかったけど、とにかく安静にそう思った。けど、必死にそうなる僕の言う事なんかまるで聞かえていない様に、僕の手を血に染めながら、彼女は言葉を搾り出していた。

そして、震える手で僕の顔を、唇を確認すると…。

「ああ、私には…、あなたの言っている事が…、もう、見えないわ……」

彼女が何を言っているのか、動転している僕には分かる訳もなかった。

「何言ってるんだ！ とにかく話すな！」

そう言いながら、必死に彼女の体から溢れ出る血を止めようとしたけど、その勢いはなんら変わらないように感じられた。

「幸せだった。 ありがとう…」

その言葉を最後に、彼女の手は僕から離れ、力なく垂れ下がった。

僕は呆然としていた。 なぜ？ 彼女が撥ねられたあたりに、あのイアホンが転がっていた。

こんな物を取りに戻ったのか？ どうして突っ込んでくる車に気が付かなかった？

けど、イアホンを、そしてその本体を取り上げて、僕は愕然とした。

それはアイポッドなんかじゃなかった。 それは補聴器だった。

そう。 何時だって、彼女は僕が話すのを見ていた。 僕の声の聞こえているんだと思ったが、彼女は僕の話す事を、唇を読んでいたのだった。

気が付いてしまえば、色々な事が符合した。

僕が彼女の耳の事に気が付いていれば、結果は変えられたのだろうか？

けど、既に全ては手遅れだった。

気が付いた時、既に彼女は失われていた。僕はその事をどう受け止めていいのか全くわからなかった。ただの一粒も涙がこぼれないのが我ながら異常だと思った。

そして、ただ一つ分かつているのは、最後に彼女が僕に託した願い、そして約束させられた事、それは「生きて」だった。

- - - - -
それでも…（ネコ、すべり台、自動販売機）

とにかく、僕は死ななかった。遥との約束を違える事は許されなかったから。

けど、遥を失ってからの僕は正に抜け殻だった。

抜け殻？ いや、どちらかと言うと精密なロボットだろうか？ それまでの経験で、仕事はそつなくこなし、たまに失敗して怒られるけど、悔しいとかそんな気持ちは一つも出てこない。

いや、そもそも、気持ちってなんだろう？

淡々と仕事をこなし、仕事が終われば家に帰る。必要な伝達事項以外はほとんど話さない。話したい、という事も、気持ちもないのだから、それでいいはず。

会社ではロボット、そして家では…。

家では、何者でもなかった、何者かである必要も感じなかった。休日になると親が

「たまには、外を散歩したらどうだ？ 気分が変わるかもしれないぞ」

そう言うので、それ以上干渉されるのが面倒で

「では、散歩に行つてきます。午後五時頃には戻る予定です」
そう告げると家を出た。

そして公園に行つてみる。彼女はいない。どこかにいるだろうか？
駅前の喫茶店に入り、彼女が来るのを待つ。けど、一向に来ない。
あ、もしかしたら、元の身体に戻っているかも知れない。そう考
えると、彼女の墓とされる場所に行つて見る。けど、今日も彼女は
戻っていないかった。

ふと空を見上げたけど、何色なのか分からなかった。知識として
は、雲もなく、これだけの晴天の場合、青い空のはずだった。けど
僕は「青ってどんな色だっけ？」そう考えていた。

「遙…。早く帰ってきてくれよ…。なあ…」
けど、応えるものがある筈はなかった。

確かに、いつもなら何も応えない。けど、その日は、僕の言葉
に応えるかの様に「ニャー…」と泣き声がした。

「え？」

意外な反応に、ふと顔を向けると、墓石の上にネコがいた。何
だ、ネコか…。そう思ったけど、次の瞬間、僕の視線はそのネコに
釘付けになった。

実は、彼女は腕に何針か縫う傷があつただけで、そのネコの前
足には、彼女の傷と同じ位置に傷があつた。まさか…？

そう思いながらも、もう一度声をかける、いや、名前を呼んでみ
る。

「は…、はるか？…」

その途端、そのネコは瞳を細めて、さも満足そうに「ニャー」そ
う言つと、僕の肩に飛び移ってきた。

その日、僕はそのネコに『ハルカ』と名前をつけた。

家に帰る途中の自動販売機でパック牛乳を買うと、ハルカに飲ませた。普通、ネコは人見知りする、というけど、ハルカは僕の手から、おいしそうに牛乳を飲んだ。

「やっぱり、おまえは遙だよな？」

家につれて帰り、親には「ネコを飼う事にした」そう告げると、そのままハルカを連れて部屋に戻った。

ハルカにはとても不思議な習性があった。それは、僕がハルカを彼女の生まれ変わり、そう確信したくなる習性だった。そう、ハルカは彼女の補聴器が大のお気に入り、部屋の中では大抵、その補聴器の脇でまるくなっていた。

そしてハルカは不思議なくらいに手間のかからないネコだった。けど、どうやらそれは僕に対してだけで、両親には全く懐かない様でもあった。

「おまえ、結構、性格悪いんだな？」

苦笑しながらハルカに向かってそう言ったけど、ハルカはお構い無しだった。

まあ、とある日に遙の両親が来た時、ハルカは妙に大人しかったけど。

ハルカとの共同生活は、見た目には僕を回復させた様だった。自分以外の存在に気をつける必要が出ると、しぜん、その他の事でもコミュニケーションをとる必要に迫られ、確かに、僕は以前よりは人と話すようになったと思う。

でも、僕の目に映っているのは、基本的にはハルカだけだった。休日等は、僕はハルカを肩に乗せて公園に行き、ゆっくりとベンチに座ったり、すべり台をすべった。その間、ハルカは僕の肩でくつろいでいた。

けど、そんな淡い、ぬるま湯の様な幸せは長く続かなかった。

どうやら、ハル力は元からかなりの高齢だった様で、出会ってからしばらくすると、見るからにやつれていった。動きも緩慢になり、僕のひざに登る事すら出来なくなっていた。

必死にハル力を看病したけれど、一向に良くならなかった。そして、とうとうその時を迎えてしまった。

何故か、その時、ハル力は震える足で立ち上がり、僕の脇にやってきた。僕がハル力をひざの上に抱き上げると、満足そうに、でも弱々しく鳴き、目を閉じた。

何分かそのままだったけど、ハル力は唐突に目を開き、僕を見上げると、まるで僕の目を真っ直ぐに見つめる様にして、とても不思議な声で鳴いた。

僕にはその鳴き声が遥の声に、彼女の「生きて」という言葉に聞こえた。誰も信じてはくれないだろうけど、それは僕だけには本当だ。

気が付くと僕は涙を流しながら頷いていた。彼女を失って以来、初めて流す涙だった。

やがて、ハル力はもう一度目を閉じ、二度と目を開けることはなかった。

「ハル力？ はるか… 遥… 遥！！」

僕は不思議なくらいに涙が溢れてきた。それまで僕の中に溜まっていた涙が、哀しみが、その出口を見つけて、一気に溢れてきたのかも知れなかった。

どれだけの間泣いたのか、どれだけの声を上げたのか、それは自分ではよく分からなかったけど、気が付いた時は翌日の朝になって

いた。

いつの間にか、遥のご両親が来ていて、ハル力を遥と同じ墓に埋葬する事を提案してくれた。彼女の両親にも何か感じる所はあったのかも知れなかった。

彼女の両親と一緒にハル力を埋葬し、線香を上げた。

「これから、どうするのかね…？」

彼女の父親に、穏やかにそう問われた。

「まだ、わかりません。 けど…」

「けど、まっすぐに生きて行きたい。 そう思っています」
彼女の両親が頷くのを見ながら、空を見上げた。

そこには、抜ける様に青い空が広がっていた。

おまけ（旧、『それでも、僕は…』）（後書き）

頂いた感想です。

投稿者： 緋色 「2010年 06月 19日（Sat）」

23時 30分 23秒 18歳〜22歳 男性

悪い点

少しだけ展開の早さが気になりました。

もう少しゆっくりでも良かったのではと。

一言

あらずじにある三題嚙三つをどう使うのか気になりました。

ちよつと強引だったかなとも思いましたが、そこまで気にもならずに最後まで読めました。

面白かったです。

Elwing 「2010年 06月 19日（Sat）」

23時 54分 58秒

感想ありがとうございます。

そうですね、『急展開』が、正に急展開で、「え？」って感じはあるかと思えます。それでも、そこまでを時間をかけてしまうと、彼女が死んだところで終わってしまいそうで、二人の幸せを、出会いの経緯をこれ以上長くすると、彼女を殺す（私にとっては、まさに殺す、という感覚でした…）事が耐えられなくなりそうで、一気に展開させました。

実のところ、最初は一話から二話までの部分を一つのお話として書きました。けど、それでは、彼女を殺しておしまい、で、私自身としてあまりに納得できず、途中をちよつと膨らませて、三話をく

つつける、という事をしました。

全体的にもっと時間をかけて、のお話にする、というのは、やってみたい、とは思いましたが、多分、そうすると、私は彼女が死ぬ、という事に耐えられなくなって、お話の方向を変えてしまいそうです。彼女を殺すお話としては、これ以上に彼女を描写すると、私自身能耐えられない気がしました…。(勝手な話ですが…)

けど、こうして、一旦、方向性が定まってしまえば、このお話のREMIXみたいな事で、語っていない部分をメインにお話を作り上げ、最後に彼女が何を思ったのか…。それを書く、というのはアリかも知れませんね……。

真摯な意見、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0286m/>

会えて良かった

2010年10月10日16時23分発行